動詞の意味を学ぶ授業書― get と turn の考察

A Textbook to Learn the Meaning of Verbs
― An Analysis of "get" and "turn"

山田　昇司*・寺島　隆吉**
YAMADA Syouzi* ・ TERASIMA Takayosi**

Keywords：動詞，成句，メタファー，イメージ・スキーマー，授業書

１．はじめに

１．１　研究の指導

この小論は寺島が指導する「課題研究」（修士論文指導）の中から生まれたものである。その意味では，これは山田さんの論文と言ってもよいものである。

しかし，毎回，山田さんが書いてくるレポートを，セミナーの学生・院生と共に議論し，その中で出てきた疑問・意見を踏まえて何度も書き直してもらった。

さらに夏休み・冬休み中は，時には私の自宅まで来てもらって議論することもあった。また最終的には寺島が目を通して加筆修正した。本論文を共著とするゆえんである。（寺島，Jan. 5, 2006)

１．２　研究の動機

このテーマに関心を持つようになったきっかけはcome onという表現であった。私の所属する研究会JAASET（略称「記号研」）のホームページ「掲示板」に，ある中学校の先生からcome onはどうして「さあ」とか「おいで」という意味になるのかという質問が寄せられたのだ。教科書ではCome on in.（入室を促す場面）とかCome on! (応援の場面) のように使われている。

上記の研究会ではＴＭメソッドに関する理論と実践を研究しているが，その中に「語順訳」というものがある（註a)。これは英語一語一語に対応する日本語を与えて語順の違いを認識させる工夫なのだが，ある程度のまとまりで丸暗記している英語教師にとって，まず一対一で対応する日本語を与えることが難しい。そして仮にそれを与えることが出来ても，今度はどうしてそこから「丸暗記している意味」が生まれるのかという疑問がしばしば起こる。「come来る，on上に」もそのような例の１つであった。

私は寺島隆吉 (2000) におけるdo away withの成句分析で示された手法を用いて，onに「状況のit」を補って説明を試みた。ところがこのonの前置詞的解釈に対してonは副詞的に捉えるべきではないかという反論が来て，掲示板上で何回かやりとりが行われた。

以来私はこの問題に興味を持つようになり研究会の機関紙に一連の成句分析 (山田 (1999a, 1999b, 1999c, 2000a, 2000b)) を書いた。本論文はそのテーマをより深く追求し，それを更にget, turn をめぐる成句にまで発展させ，「授業書」というかたちでまとめたものである。

２．本研究の目的と方法

２．１　中学英語で学ぶ単熟語の量

本研究では平成14年度版の中学校英語教科書で用いられている単熟語をその主たる対象として分析する。以下は現在日本において発行されている７種類21冊の教科書名である。（平成18年度から全て改定される予定である。）

堀口俊一ほか17名 (2005) TOTAL ENGLISH New Edition 1,2,3　学校図書
松畑熙一ほか29名 (2005) SUNSHINE ENGLISH

* 岐阜県立山県高等学校
** 岐阜大学教育学部

COURSE 1,2,3 開隆堂
森住衛ほか28名 (2005) NEW CROWN ENGLISH SERIES 1,2,3　三省堂
笹島準一ほか43名 (2005) NEW HORIZON English Course 1,2,3　東京書籍
佐々木輝雄ほか26名 (2005) ONE WORLD English Course New Edition 1,2,3 教育出版
東後勝明ほか14名 (2005) COLUMBUS 21 English Course 1,2,3　光村図書
渡部昇一ほか21名 (2005) TOTAL active.comm. ENGLISH FOR ACTIVE LEARNERS 秀文館

瀬谷廣一 (2004) の調査によれば，これらの教科書に登場する単語 (e.g. able, abroadなど), 複合語（e.g. alarm clock, bus stop など），熟語（e.g. a couple of, clean upなど）の数は全部で3894語，274個，531個ある。

これらの単熟語総数のうち，ひとつの教科書に３年間で出てくる数を数えると，平均してそれぞれ1300語，40個，200個程度（註１）となるのだが，それにしてもこれだけの言葉を，教室外でほとんど使用する必要も機会もない日本人学習者が覚え切ることはなかなか大変なことである。

時折「中学校の教科書に出てくることだけでもマスターすればけっこう英語は使えるようになる」という主張を耳にするが，それは言うほどに容易いことではない。個人的なことであるが，私は中学・高校と英語を６年間学んで大学は外国語大学英語学科というところに入学したのだが，その１年生のLLの授業のディクテーションで「土曜日」の綴りを間違えて指導教官に太い赤線を引かれたことがある。英語がそれなりに得意と思って英語を専攻に選んだ者にさえそのようなことが起こりうるのである。

しかし少し考えれば，このことは至極当然のことと言えるかもしれない。なぜなら日本語ですら普段使わない漢字は忘れてしまって，いざ書こうとすると辞書を開かなくてはならないことはよく起こるからである。文書作成ソフトがキーひとつで求める漢字に変換してくれるようになってからは，私はよく使う言葉でさえ自分の手で書こうとすると書けないということをしばしば経験する。

２．２ 縦糸を通す

２．２．１　play と have の場合

このように記憶力だけがものを言いがちな英語学習の負担を少なくするにはどうしたらいいのだろうか。そういった観点から531個の熟語リストの中の，特に，動詞を含んだ表現を眺めてみたい。

まず気づくのは単語の意味さえ知っていればその意味が容易に想像できる熟語があることである。次に掲げるのは，その熟語リストの中の動詞 play を含む表現の全てである。

play baseball, play basketball, play catch, play cricket, play football, play games, play go, play jazz, play marbles, play rugby, play shogi, play soccer, play softball, play tennis, play the batokin, play the flute, play the guitar, play the piano, play the violin [熟語リスト No.376-395]

この19個の熟語は，「play＋スポーツ，play the 楽器名」というふうに分類すれば，後はスポーツ名，楽器名を知っていさえすれば理解できるのであえて熟語と呼ぶ必要はないかもしれない。

次の例はhaveの熟語として掲げられている表現の全てであるが，have been toを熟語として扱ってよいかという問題はさておくとしても，それを除く35個はすべて「have+目的語」＝「～を持つ」でまとめてしまうことが可能である。

have a car accident, have a cold, have a cut, have a difficult time, have a dream, have a farewell party, have a fever, have a goal, have a good day, have a good flight, have a good harvest, have a good idea, have a good time, have a great time, have a hard time, have a

headache, have a look, have a lot of fun, have a nice smell, have a nice time, have a party, have a problem, have a question, have a toothache, have a wonderful time, have an idea, have been to, have fun, have a good eyes, have lunch, have much pain, have no time, have the wrong number, have time, have to, have trouble with ［ 熟語リストNo.225-260 ］

have a car accident「車の事故を持つ」→「車の事故に遭う」，have a cold「風邪を持つ」→「風邪を引く」，have a cut「切ることを持つ」→「髪の毛を切る」といったように，日本語の力さえあれば簡単にそれぞれのhaveにふさわしい訳語を与えることが出来る。これは英語の学力がいかに密接に日本語の力と結びついているかということを示している。

２．２．２　takeの考え方

ところがplayやhaveとは異なって一筋縄ではいかないものがある。次に挙げるtakeを含んだ表現はその一例である。

take a bath, take a bite, take a break, take a look, take a look at --, take a picture, take a rest, take a walk, take -- away, take -- back to --, take care, take care of, take in --, take it easy, take off, take one's time, take out --, take part in-- [熟語リスト No.448-465]

これに関して寺島隆吉 (1990) に下記のような考察がある。これは「（語順訳の）穴埋め中間言語にはちょっと無理があるのではないか」「できない生徒は "take off" とまとめた方が辞書を引くときわかりやすいと思う」という研究会会員からの質問に対して回答されたものである。

> 生徒には，彼らの負担にならないように，どのように教えても良いと思うのですが，教師の勉強のためには，やはりtakeとoffを分けて考えてみることが大切です。
>
> なぜなら，take「とる」，off「分離」（〜から離れて）とおさえておけば，
>
> (take) his jacket [off [himself=his body]]
>
> (取る)　上着［〜から［自分の体]]
>
> →　上着をぬぐ
>
> と説明できるだけでなく，
>
> take the first prize「一位をとる」
>
> take responsibility「責任をとる」
>
> take ten hours「時間をとる」
>
> take ill of him「（彼のことを）悪意にとる」
>
> off duty「義務から離れて（非番で）」
>
> off the coast of Kishu「紀州の沿岸から離れて（紀州沖に）」
>
> など応用範囲が極めて広くなるからです。

take ten hoursの「時間を取る」という訳語は学習者に日本語力さえあれば「時間がかかる」という表現にすることは難しくない。

副詞とみなされているoff に対して，消えている目的語を補うことでoff duty, off the coastとも関連させているところにも注目したい。この考え方は以下の例文に出てくるようなaway, out, back, inなどについても応用することが出来る。

1. Look! What a wonderful view! ---- It **takes** my breath **away**. [Total active. 3]
2. You can get your food here and **take** it **out**. [One World 2]
3. When they get well, we **take** them **back** to the ocean. [One World 2]
4. You must **take off** your shoes here. [One World 2]
5. Well, a natural cure may be forests. Forests can **take in** CO_2. [Crown 3]
6. Discovery **took off** with seven astronauts this afternoon. [One World 3]

また例文6にあるような自動詞用例として出てくる「take off 離陸する」については，田

中茂範 (1990) に次のような分析がある。

上では，他動詞用法を中心にみてきたが，takeにはThe plane took off.（飛行機が離陸する）とかHe took to drinking.（酒びたりになる）のような自動詞用法があり，一見，＜取り入れ＞の行為とは，全く無関係であるといった印象も与えるが，これらの場合もここで提案しているコアを使って説明することが可能のようである。

The plane took ϕ off (the ground)

[i.e. The plane [X] took (itself [Y]) off] → X = Y

He took ϕ to drinking.

[i.e. He [X] took (himself [Y]) to drinking.] → X = Y

ここで示すように，＜飛行機（X）が自分自身（Y）をtakeし，滑走路から離れる＞と＜彼（X）が自分自身（Y）をtakeし，酒を飲んでいる状態(drinking)のところに持っていく＞と解釈できるからである。

この分析では田中は自動詞takeに再帰目的語を補って考えているが，どのような目的語を補うかが成句解釈の鍵となる。このような手法を用いれば，お互いが独立してバラバラのように見える熟語がお互い相繋がりあったものとして立ち現れてくる。

本研究の目的はこれまで述べてきたような手法を用いてバラバラに存在するかに見える熟語群に連関の縦糸を通すことである。また併せて，「イメージ・スキーマ」の概念を導入して副詞の意味を視覚的に捉えること，副詞の意味の拡張をメタファー的に理解することも目指したい。

２．３　記述形態について

本論の中の「getの話」「turnの話」の記述は，板倉聖宣 (1988, 2001) が提唱する「仮説実験授業」における「授業書」の形態を真似て学習者に問いかけながらその話を進める。（注２）

寺島隆吉 (2000) はこの授業書のスタイルを英文法の授業にも応用することを提案し，「進行相」「完了相」の授業書案を提示している。寺島はこの授業を「仮説実験」ではなくて「思考実験」と呼んでいる。なぜならこの授業では実験の代わりに，動詞の意味を分析したり答えの候補を英訳したりしながら討論が行われるからである。

この授業書のスタイルを基本にはしたが，学習者が実際に書き込みをしながら理解していくような授業プリント的要素も加えたため，結果的にはむしろ，同じく板倉聖宣ほか (1997, 1998a, 1998b) が提案する「新総合読本」のスタイルにより近いものになった。

本研究が，学習者が言葉の成り立ちの不思議さに興味関心を持ち，外国語学習に付きものである，無味乾燥な「語彙目録」暗記の負担が少しでも軽減されることを願う。

３．get の分析

３．１　教科書での意味の分類

先に紹介した瀬谷の熟語リストには英熟語として531個が掲載されているが，その中でgetの熟語として載っているものは31個 (No.150-180) を数える。

筆者は各教科書の巻末にある単熟語索引でこれらの熟語が意味の上でどのように分類されているかを調べてみた。以下に３つの教科書の例を紹介する。（例文のないものは本文にある例文をe.g.として載せた。）

例１　get [get] 動詞　[New Horizon 3]

① …を得る，手に入れる，受け取る

e.g. Today I got your new one.

② get up 起きる，起床する

③ 着く，到着する

get to …に着く，到着する

④ (…の状態)になる

e.g. So I get very hungry.

⑤ get together 集まる

⑥ 分かる，理解する

e.g. I got it!

例２　get [get] 動詞　[Total English 3]

①（ある状態に）なる

e.g. get up 起きる

get in 中に入る

get up 起きる

I get it! わかった。

②着く

get home 家に着く・帰宅する

get there そこに着く

③（〜を）とる，とってくる

e.g. Go and get some strawberries for me.

例３　get 動詞　[TOTAL active 3]

① 手に入れる，もらう

e.g. We get a long summer vacation in December and January

② 行く，来る

When did you get there?

いつ着きましたか。

③ なる

get homesick ホームシックになる

get worse 悪くなる

get lost 迷う

get on（バスなどに）乗車する

get back 戻る，帰る

get married　結婚する

この３例を比較すると，getの語義として３〜４種類の意味が挙げられていることや同じ表現でも分類が異なることに気付く。

例えばget upは，例１では単独で「起きる」の意味を与えられているが，例２では「ある状態になる」の意味に一旦分類されてから「起床する」の意味が与えられている。

また，I got it! (I get it!) は例１では「分かる，理解する」の例文として挙げられているが，例２では「ある状態になる」の例として載っている。

例３では，「なる」に分類されている７例のうち5例は訳語に「なる」が現れておらず，学習者はどうしてこの5例が「なる」と関係あるのかをすぐには理解できない。

このような分類法でgetの語義が与えられていると，学習者はこれらの一連の表現を整理しようとした時，いくつかのまとまりには分類できても，ひとつのgetに繋がるものとしてではなく，お互いがバラバラのままで記憶することになる。

筆者は次節で述べる「getの話」において，getを含むそれらの表現が実は全て一本の縦糸で繋ながっているということを示したい。

３．２ 授業書「getの話」

ここからは実際に中学生もしくは高校生が使う教材を想定しているので「です」「ます」調の文体を用いる。

３．２．１　getとtakeの違い

ポケモンの流行以来「ゲットする」という言葉はすっかり日本語として定着してしまいました。takeという動詞と意味が似ていますが，get の方は「努力して手に入れる」，takeは「自分の意志で手に取る」というニュアンスがあります。「ポケモン，ゲットだぜ」という台詞からはポケモントレーナーが苦労してポケモンを手に入れた感じが出ていますね。

では，次の２つの文の違いを比べてみましょう。

1. He got first prize in the contest.
2. He took first prize in the contest.

どちらも「一等賞を取った」と訳されても，He got...の方は「頑張って一等賞を取った」という感じがあり，He took...の方は「一等賞をつかみ取った」という積極的な印象が出てきます。そういう微妙な違いがありますが，一応「get=得る，take=取る」とまとめておきましょう。

３．２．２　「得る」は文脈で変化する

さて，次の例文は中学校の教科書に出てくるgetの例文ですが，どんな日本語を入れると一番ぴったりくるでしょうか。どんなものを手に入れるかでgetの訳が変わって来ます。

1.

Nick: Kenta, how do you **get** a place at the flea market?

Kenta: You go to City Hall and ask for a place.

ニック：健太，フリーマーケットの場所はどうやって（　　）んだい？

健太：市役所に行って頼むんだよ。[One World1]

2.

This year class D of the second year **got** first

prize.（gotはgetの過去形「～した」）
今年は２年D組が一等賞を（　　）。
[Columbus 2]
3.
You can **get** a train from London to Windermere Station. The trip takes about 4 hours.
あなたはロンドンからウインアミア駅まで列車に（　　）ことが出来ます。その旅はおよそ４時間かかります。[Total active 3]
4.
Did Virginia **get** an answer from Santa Clause?
バージニアはサンタさんから返事を（　　）ましたか？[Sunshine 2]
5.
Waitress: *Super Salad ?*
Jiro: That sounds good. I'll have that, please.
Waitress: Sir, would you like *Super Salad ?*
Jiro: Yes. *Super Salad,* please.
Waitress: Would you like soup...or...salada?
Jiro: [Oh! I **get** it. SOUP or SALAD? I feel so stupid!] I'd like salad, please.
ウエイトレス：スパーサラッド？
次郎：それはいいですね。それを下さい。
ウエイトレス：Would you like スーパーサラッド?
次郎：はい，それをお願いします。
ウエイトレス：Would you like スープ・・オア・・サラッド?
次郎：[あ，（　　）。スープかサラダということなのかな。私はなんてぼんやりしてたんだ！] サラダを下さい。[Total English 3]

順に，1.「手に入れる，確保する」，2.「取った，獲得した」，3.「乗る，乗車する」，4.「もらい，受け取り」，5.「分かった，理解できた」といった言葉が入ります。

例文5 では，「得るもの」は「相手が伝えようとしている内容」ですね。getはこのように目に見えない抽象的なものにも使えます。

いくつもの訳語を記憶しなくとも，「得る」という意味さえ知っていれば，そこに最もふさわしい訳語は前後関係で自然と出て来ることが分かったでしょうか。

ところで，getが現在形なのに「分かった」と訳しているので変に思う人がいるかも知れませんが，この「た」は過去ではなくて完了の意味を表しています。

次に２つの「た」を比べて見て下さい。どちらが完了でどちらが過去か分かりますか。

1. 昨日の授業でその内容が分かった。
2. 彼の説明を聞いて級友はみんな「分かった！」と声を上げた。

I get it.と同じような表現に，I forget his name.「彼の名前を忘れた」，I see.「なるほど，分かった」というのもあります。get, see, forgetという動詞は意味の中に「動作の完了」が含まれることがあるので，見かけは「現在形」なのにそのような訳が出てくるのでしょう。

３．２．３　「～になる」の get

今度は「～になる」という意味のgetを見ていきましょう。まず，以下の熟語の訳を全て「～の状態になる」という言い方で揃えてみましょう。

get homesick　ホームシックになる
　→（ ホームシックの状態 ）になる
get better　よりよくなる
　→（　よりよい状態　）になる
get cold　寒くなる
　→（　　）になる
get dark　暗くなる
　→（　　）になる
get hungry　お腹が空く
　→（ お腹が空いた状態 ）になる
get old　年を取る
　→（ 年を取った状態に ）になる
get tired　疲れる
　→（　　）になる
get well　回復する
　→（　　）になる
get wet　濡れる
　→（　　）になる

get lost　道に迷う
　→（　道に迷った状態に　）になる
get married　結婚する
　→（　　）になる
get angry　腹を立てる
　→（　　）になる
get nervous　緊張する
　→（　　）になる
get interested in ~　～に関心を持つ
　→（～に関心を持った状態に）になる
get ready for ~　～の準備をする
　→（　　）になる

どうですか，上手く穴埋め出来ましたか。15個のgetは全て同じ意味「～になる」であることが分かったと思います。こんなふうに英語にしやすい日本語に直せるようになると英作文の力も付いてきます。

ところで，「腹を立てる」というのがどうして「怒る」という意味になるか知っていますか。それは昔の日本人が「こころ，考え，気持ち，感情」がお腹の中にあると考えたからでした。

腹＝気持ちと考えれば，「気持ちを立てる」→「腹を立てる」＝「怒る」となりますね。中国語には「立腹」という言葉はありませんが，「怒髪天上衝冠」（史記）という言葉はあります。日本語にもこれに由来する「怒髪天を衝く」という表現があります。

それはさておき，こんなふうに考えれば，「腹を探る」「腹を固める」「腹を決める」「腹を見抜く」「腹を読む」という言葉の意味も想像できますね。でも英語に直すときに，「a stomach をstandする」「a stomachをlook forする」などと考えてはダメです。まず日本語でその言葉の意味をよく理解してからそれに合った英語の言葉を探して下さい。

腹を探る → 相手の気持ちを推測する
　→ guess one's feelings
腹を固める，腹を決める → 心を決める
　→ make one's mind
腹を見抜く→ 相手の気持ちを見抜く
　→ see through one's feelings
腹を読む → 相手の心を読む
　→ read one's mind

次節では，この「～になる」という意味と「～を得る」がどう繋がっているかを説明します。

3．2．4　「～になる」vs「～を得る」

3．2．4．1　「得る」の方が300年早い！

getという語はもともとは「～を得る」という意味でした。The Oxford English Dictionary（オクスフォード英語辞典）にはその単語が最初に文献に現れた年が書かれているのですが，それによれば，getは1200年頃に「何かを苦労して手に入れる」という意味で出ています。一方，「～になる」という意味は16世紀の終わりにシェクスピアの「ベニスの商人」という作品で初めて出て来ています。

How to get clear of all the debts I owe.
どうやったら私の借金はclearになるのか

「借金がclearになる」とは「借金がなくなる」ということですが，前節で学んだ「～した状態」を使って，「なくなった状態を得る」→「なくなった状態になる」と考えれば，「得る」と「～なる」が自然に繋がってきますね。（註3）

3．2．4．2　センマルセンで考える

さて今度はこの「～になる」と「～を得る」の繋がりを文の仕組みで見てみます。前に出てきた，He got first prize.にもう一回登場してもらいます。

この文はgotの前後が名詞になっています。動詞のgotにマルを付けて，前後の名詞にセンを引くと，「センマルセン」となりますね。この「名詞＋動詞＋名詞」，つまり「センマルセン」が英語の語順の一番の基本です。（註4）

センマルセン		
He	(got)	first prize.
彼	得た	一等賞

次に，He got sick.（彼は病気になった。）

という文を考えてみましょう。この文のsickは名詞ではなく形容詞なのでセンにはなりません。それでは，２つ目のセンはどこに行ったのでしょうか。

He	(got)	?	sick.
彼	得た		病気の状態

実はここに「himself彼自身」という言葉が消えているのです。

センHe	マル(got)	センhimself	sick.
彼	得た	彼自身	病気の状態

そして，himselfとsickは「主述」すなわち，「～が…である」という関係（ネクサス）が成り立っています。従って，「彼は彼自身が病気の状態を得た」→「彼は病気になった」となるわけです。

３．２．５　動詞と副詞

３．２．５．１　up の場合

では今度は，動詞と副詞が組み合わさった熟語について考えてみましょう。これも前節でやったように，センマルセンに戻れば簡単です。

I (got) up at six o'clock.
センI　マル(got)　センmyself　up　at six o'clock.
→ 私　得た　自分自身　upの状態　６時に

myselfとupが主述の関係になるので，「私は６時に自分自身がupの状態であることを得る」→「私は６時にupの状態になる」となります。人間は横になって眠り，目が覚めると立ち上がることから，起きることにup（上）という空間のイメージを使います。だから，「upの状態になる」とは「起きる，起床する」という意味を持つようになるのです。

Wake up, wake up.　It's time to get up.
起きろ，起きろ。　もう起きる時間だぞ。
[瀬戸 (2001)]

反対に，眠るときはdown（下）という空間の概念を使って，He fell asleep.（彼，落ちた，眠っている状態＝彼は眠りに落ちた）といった文になります。

このupとdownの関係は人間の気持ちを表すときにも使われます。人は元気ではつらつとしているときは真っ直ぐな姿勢upになり，悲しいことがあったり気持ちが沈んでいる時はうなだれた姿勢downになります。

1. I'm feeling up.　気分は上々だ。
2. You look down. What's happened?
落ち込んでるみたいだね。どうしたの。
[瀬戸 (2001) 和訳一部変更]

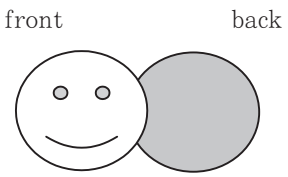
日本語でも「気分上々」「落ち込む」といった表現になるのは面白いですね。他にはどんなものがあるでしょうか？プラス・イメージの「上」とマイナスイメージの「下」の言葉を少し考えてみましょう。[参考：レイコフ(1986), 瀬戸 (1997)]

a. プラス・イメージの「上」
将棋がうまくなる→将棋の腕が（　　）
成績がよくなる　→　成績が（　　）
立派な心がけだ　→（見　　）心がけだ
東京に向かう列車　→　（　　）列車
b. マイナス・イメージの「下」
人を軽蔑する　→　人を（見　　）
成績が悪くなる　→　成績が（　　）
試験に不合格になる　→　試験に（　　）
東京から離れる列車　→（　　）列車

３．２．５．２　back の場合

get backも同じように，「get oneself back」と考えて，「自分がbackの状態を得る」から「backの状態になる」となります。

backはもともと人間の体の背面のことで，front 前面と対になる言葉です。背面backからは「後ろへ戻る動き」が生まれ，get backは「戻る」となるわけです。



I'll call you when I get back.
戻ったら電話します。[Total active 3]

「get home」「get to＋場所」「get together」についても同じ要領で考えてみましょう。

get home
→　get oneself home
→　自分がhomeの状態 を（　　得る　　）
→　homeの状態 に（　　なる　　）
→　家にいる状態 になる
→　帰宅する

get to the village
→　get oneself to the village
→　自分がto the villageの状態 を（　　）
→　to the villageの状態 に（　　）
→　村に到着した状態 になる
→　村に到着する

get together
→　get oneselves together
→　自分たちがtogetherの状態を（　　）
→　togetherの状態に（　　）
→　集まった状態に（　　）
→　集まる

このように考えれば，「get back 戻る」「get home 帰宅する」「get to …に到着する」「get together 集まる」とバラバラで覚える必要はなくなります。getはやっぱり「得る」なのです。（註５）

３．２．６　get＋名詞＋副詞

さて今度は動詞の後に名詞が来ている場合を考えて見ましょう。前節で出てきたget backが，I got back.ではなくI got my dreams back. というふうに出てくる場合です。

この場合もやっぱりセンマルセンで行きましょう。今度はmy dreamsがセンになるからもっと簡単です。

セン　マル　セン
I　(got)　my dreams　back.
私は　得た　私の夢　戻った状態
→　私は 私の夢が戻った状態を得た。
→　私は自分の夢を取り戻した。

get togetherも「get+名詞+together」という形で現れることがあります。この場合も，先のget my dreams backと同じように考えます。

例えば，We got the children togetherという文は以下のようになります。

セン　マル　セン
We　(got)　the children　together.
私たち　得た　子ども達　集まった状態
→ 私たちは子ども達が集まった状態を得た。
→ 私たちは子ども達を集めた。

getの後に名詞が来ているときは，それがback, togetherの状態をgetすると考えるのです。

３．２．７　自動詞と他動詞

ここでget up, get home, get to, get back, get togetherについてまとめてみましょう。

実は，get back, get togetherだけではなく他の３つの表現も全てgetの後に名詞が来ることがあるのです。次の文を見て下さい。

Please get me up at 7.30 tomorrow.
明日７時半に私を起こして下さい。
Don't worry.　I'll get you home safely.
心配しないで。 私は君を家まで無事に帰宅させる（送る）から。
We have to get our children to school.
私たちは子ども達を学校まで
到着させ（送ら）なくてはならない。

ここで以下の表の空欄を埋めながら，自動詞と他動詞の違いを整理してみましょう。

自動詞	他動詞
get up　起きる	get ～ up ～を（　　）
get home　帰宅する	get ～ home ～を（　　）
get to…　…に到着する	get ～ to… ～を…に到着させる
get together　集まる	get ～ together ～を（　　）
get back　戻る	get ～ back ～を（　　）

自動詞と他動詞は英語では同じ形をしていますが，日本語では動詞の語尾が変化して異なる言葉になります。

３．２．８　get ＋［前置詞 名詞］

前節のget＋名詞＋副詞と似ていますが，名詞の位置が少し違います。get in…（…に乗る），get on…（…に乗る），get off…（…から降りる）という表現がありますが，やはりここでも，oneselfを補ってセンマルセンを当てはめてみましょう。

Amy got in the plane.

　　セン　　マル　　セン
→ Amy (got) herself in the plane.
　エイミ　得た　彼女自身　飛行機の中
→ エイミーは彼女自身が飛行機の中にいる状態を得た。
→ エイミーは飛行機に乗った。[New Crown 3]

There he (got) on another ship.

　　セン　マル　セン
→ There he (got) himself on another ship.
　そこで　彼　得た　彼自身　別の船の上
→ そこで彼は自分自身が別の船の上にいる状態を得た。
→ そこで彼は別の船に乗った。[One World 2]

同じ「乗る」でも，get inとget onでは違いがあります。inの方は「中に乗り込む」，onの方は「上に乗る」という感じでしょうか。

次の例文のように前置詞の後ろの名詞がなくなって副詞のようになっているものもあります。

For a bath, put water in the bathtub, get in [　　], and wash.

お風呂に入るなら，浴槽に水を入れて，中に入り，洗うんだよ。[Total English 3]

get in the bathtub（浴槽の中に入る）と言うところを文脈から分かりきっているのでthe bathtub（浴槽）は省略されました。

get off…も同じようにget oneself off…と考えて，「自分が…からoffの状態を得る」→「…から離れた状態を得る」→「…から降りる」となります。

なお，onとoffはそれぞれ接触と分離というイメージがあります。

on　　off
接触　　分離

３．２．９　まとめ

これまでgetが単独の時の「得る」「もらう」「分かる」「～になる」という意味から，熟語になったときの「起きる」(+up)，「戻る」(+back)，「集まる」(+together)，「乗る」(+on)，「降りる」(+off) などたくさんの意味を見てきましたが，どれもこれも「get 得る」から来ていることが分かりましたか。

これからgetを訳すときはこの基本の意味「得る」と副詞や前置詞のイメージを思い出して下さい。

４．turn の分析

本節では，getと同じように，副詞といっしょになって多様な意味を作りだす動詞turnについて考察する。中高生が学ぶ教材として記述するので「です」「ます」調の文体を用いる。

４．１　「turnの話」

４．１．１　日本語にもなっているターン

turn は「ターン」と発音しますが，すでに日本語の中にもよく出てきます。どんな意味で使われているか以下の例文から想像してみましょう。

・お正月やお盆の前後の新幹線や高速道路はいつもUターンラッシュで混雑します。
・中華料理の基本マナー：大皿に盛られた料理がターンテーブルに運ばれてきたら，まずは上座の人に回します。次からは右回りで静かに回し順序よく料理を取っていきます。
・スキー合宿はとっても楽しかった。始めはボーゲンしかできなかったけど，練習したらパラレルターンが出来るようになりました。

turn「ターン」は「曲がる」「回転する」という意味ですね。お菓子の名前に「ハッピーターン」というのがありますね。このお菓子は第１次オイルショックの影響で日本中が不景気な時に，「幸せ（ハッピー）が戻って（ターン）来るように」ということで命名されたということですが，本当はturnにbackを付けないと「戻ってくる」ことにはなりません。そういったturn にまつわる話をこれから紹介します。

４．１．２　turn はどこから来たのか

OEDという英語の辞書にはその単語が初めて書き言葉として使われた年やその文が書かれていますが，それによれば，11世紀の始め頃に「回転する」と「回転させる」の両方の意味で使われていたと書かれています。

ではここで問題です。

＜問い＞　あなたはこのふたつの意味の内，どちらの意味が最初に出来たと思いますか。

＜予想＞　１．「回転させる」が先に出来た。
２．「回転する」が先に出来た。
３．同時に出来た。

＜答え＞　この言葉を古英語の時代からさらに千年さかのぼってローマ帝国の時代に戻ってみてみると，ラテン語のトルナレtornareになります。この言葉は「ろくろで回転させる」という意味でした。さらに遡るとギリシャ語のtornos「ろくろ」「円を描く道具」にまで行き着きます。[小島義郎ほか (2004)]

「円を描く道具」や「ろくろで回す」から考えると「回転させる」の方が先のようです。英語にはこのturnの他にもmove, open, breakなど運動・変化の動作を表す動詞があり，他動詞と自動詞の両方の意味があります。 原因→結果の順番で考えると，他動詞→自動詞の順でできたのではないかと思われます。（註６）

次の空所を適当な日本語で埋めてみてください。日本語は英語とは違って，違った言葉で他動詞・自動詞を表していることがわかるでしょう。

move a stone　石を（　　）
→ The stone moves.　石が（　　）
open the door　戸を（　　）
→ The door opens.　戸が（　　）
begin the play　劇を（　　）
→ The play begins.　劇が（　　）
break the ice　氷を（　　）
→ The ice breaks.　氷が（　　）

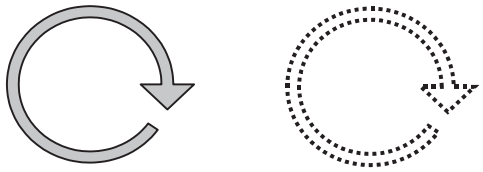
４．１．３　「回転する」「回転させる」

turnの元々の意味である「回転する」「回転させる」で使われている例文には次のようなものがありますが，実際の動作を表しているものとそうでないものがありますね。その区別が分かりますか。

1. Turn around like this.
こんなふうにぐるりと回りなさい。
[Horizon 2]
2. The Ferris wheel turns very slowly.
観覧車はゆっくり回る。[若林 (1997)]
3. The earth turns around the sun.
地球は太陽の周りを回る。[同上]

4. My head is turning.
私の頭はぐるぐる回っている。[小西 (1985)]

例文４では実際に頭がぐるぐる回っているわけではありませんね。このような使い方を比喩的な使い方といいます。「頭がふらふらする状態」を「ぐるぐる回っている」動作に例えて言った表現です。日本語でも英語でも同じ言い方なのは面白いですね。



実際の動作　　比喩的表現
（動作が見える）　（動作は目に見えない）

turnには「順番」という意味もありますが，これは「順に回ってくるもの」というところから来ています。これも「回る動作」が目に見えない比喩的な表現です。

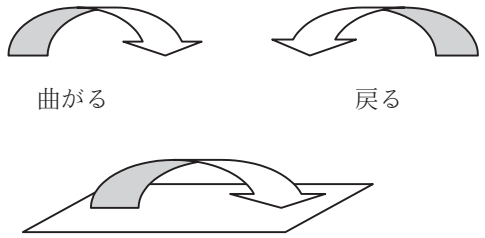
1. Now it's your turn, Takeshi.
今度は君の番だよ，タケシ。[Sunshine 3]
2. They put his bed in the dining room and took care of him by turns.
彼らは彼のベッドを食堂に置いて交代で彼の世話をした。[Sunshine 3]

４．１．４　回転の動作の一部分になる

回転する動作の一部分だけだと，「ある方向に曲がる」とか「ある方向を向く」という意味が生まれます。この場合も実際の動作が目に見える時と見えない時があります。

1. Turn left there and go along that street.
そこを左に曲がってからその通りに沿って進みなさい。[One World 2]
2. They couldn't turn back.
彼らは戻ってこれなかった。[One World 3]
3. Turn them over when the color changes.
色が変わったらそれを裏返しなさい。[One World 2]

turnにback（戻って）がつくと曲がる方向が逆になり，over（おおって）がつくと何かの上を覆うようにという感じが加わります。例文３は，オーブントースターで焼きおにぎりを作る手順のひとつを示した文なので，下の面はオーブントースタの中の受け皿をイメージすればいいでしょう。180度の回転の前後で表裏が反対になりますね。



曲がる　　戻る

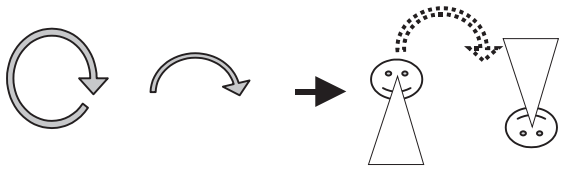
裏返す

もちろんこの意味の時も動作が目に見えない比喩的な意味があります。

4. She turned her attention to the beautiful scenery.　彼女はその美しい景色に注意を向けた。[若林 (1997)]
5. He turned the room to a great many uses.
彼はその部屋を色々に利用した。[小稲 (1985)]

４．１．５　「回わる」から「変わる」へ

「回る」の動作からその一部分を切り取ることで「方向が変わる」という意味が生まれましたが，さらにそういった物理的動作から，比喩的に「～になる」「～にする」という「変化」「推移」を表す意味が出てきました。体を回すと目に映るものが変わりますね。「回る」は「変わる」に通じるところがあるのかもしれません。



回転　　方向転換　　変化・推移

The lizard turned hard and heavy. そのトカゲは固くそして重くなった。[Horizon 2]
Some turned red and others turned yellow. 何枚かの葉は赤色に変わり，また他の葉は黄色に変わった。[Horizon 3]

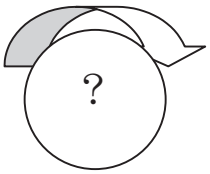
The lotus flower faded and turned into a pod of seeds.　蓮の花は消え，種のさやになった。[One World 3]（註b）

4．1．6　turn on は何を回していたのか

次に，turn on, turn off という熟語について考えてみましょう。これは，turn on the light「電気をつける」，turn off the television「テレビを消す」のように使いますが，今のテレビや電気のスイッチは回したりしませんね。ボタンを押したり，ひもを引くだけです。さて，ここで問題です

＜問い＞　この熟語が使われた19世紀の初め頃のイギリスでは，一体何を回していたのでしょうか。この頃はもちろんテレビはありません。

＜予想＞
1．ラジオのスイッチ
2．ガスを出す元栓
3．水道の蛇口



＜答え＞

答えは2．のガスを出す元栓です。

この熟語は1833年に初めて次の英文に登場したとOEDには書かれています。

He turned on the gas in his back room to an unusual brightness.
彼は奥の部屋のガスをつけて異常な明るさにした。

この英文から分かるように，ガスは照明用に使われていました。ガス灯を発明したのはイギリス人技師のウィリアム・マードックでした。マードックは1792年に，石炭から得たガスの炎で，自分の家を照明しました。この実験の成功によって照明用のガス利用が発展し，19世紀半ばまでに，欧米の主な都市ではガス灯の明かりが街路を明るく照らしていました。

でも一般の人々の家の中にまでガスの灯りが入ってきたのは1880年代のことでした。そのことから考えると，上記の例文に出てくる部屋は相当お金持ちの人の家の話でしょうね。[上図はセイモア(1989) より]

それ以前に使われていたろうそくやランプは，シャーロック・ホームズの時代になってガス灯に変わり，さらにそれは20世紀はじめ頃からは電気に取って替わられることになりました。従って，turnされるものはガス灯の元栓から電気のスイッチに変って行くことになりました。

4．1．7　the gas は回せるのか？

turn the gasというのは，実はturn the gas cock，つまり「ガスの元栓を回す」ということなのです。だから回されるものがturnの目的語として現れていることも時々あります。

In 1992, after seven years of hard work by Robert Schemenauer and his team, a water tap was turned on in the village.
1992年，ロバート・シュメナウアーと彼の仲間が7年間苦労を積み重ねた後で，その村で水道の蛇口が回された。[Columbus 2]

しかしturn the water tap とわざわざ言わなくてもturn the waterと言えば相手に通じる場合も結構あります。例えば，わざわざ「黒板の字を消す」と言わなくとも「黒板を消す」で実際は話が通じるのと同じですね。

次の空所に適当な言葉を埋めてみて下さい。

1. テーブルを片づける
　＜(テーブルの上の物）を片づける
2. 冷蔵庫を開けたままにする。
＜(　　)を開けたままにする。
3. 風車が回っている。
　＜(　　)が回っている。
4. ヤカンが沸いている
　＜(　　)が沸いている
5. ろうそくを消す
　＜(　　)を消す

できましたか。答えは順に，冷蔵庫の扉，風車の羽根，ヤカンの水，ろうそくの火となりま

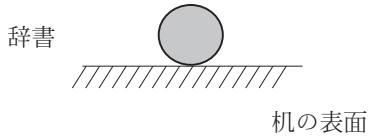
す。私たちも日本語をふだんこんなふうに使っているのです。[瀬戸 (1997)]

これらの表現はそのまま英語に移し換えることが出来ます。言葉は違ってもその背後にある言葉に対する考え方は同じです。

1. clean the table (the things on the table)
2. leave the fridge (the fridge door) open
3. The windmills (The windmill blades) are turning.
4. The kettle (The water in the kettle) is boiling.
5. blow the candle (the candle light)

４．１．８　on がどうして「点く」なのか

onについてはおなじみの例文There's a dictionary on the desk. は「机の上に辞書がある。」でまず考えてみましょう。onの原義は何かに＜接触している＞という意味です。この文で言うと，辞書は机の上に＜接触して＞いるのです。



これをturn on the gasについて当てはめると，「ガスの元栓を回して，onの状態（＝接触している状態）にする」となります。

さて次に，「onの状態」については，a dictionary on the deskと比較して考えてみましょう。a dictionary [on the desk] が「机」と「辞書」の接触した関係を表しているように，turn on のon も何かと何かの関係が接触していることを示しています。

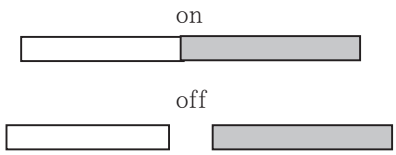
on the deskのonは前置詞で，turn onのonは副詞だから同じように考えることはできないのではないかと思う人があるかもしれませんが，そんなことはありません。前置詞はもともと副詞から生まれたものなのです。このonだけでなく他にも前置詞と副詞が同じ形をしているものがあるのはそういう訳があるからです。

off　in　down　up　over　along　about　through　across

例えば，次の文では前置詞の目的語が前後関係から明示しなくとも読み手に分かるのでその目的語が省略された結果，前置詞であったものが副詞に変わってしまうのです。[小西 (1976)]

Take your hat off your head.
　頭から帽子を取りなさい。
　→　Take your hat off.
　　帽子を取りなさい。
I haven't seen him since then.
　　その時以来彼に会っていない。
　→　I haven't seen him since.
　　以来彼に会っていない。

話をガス灯を点けるときのon，消すときのoff に戻しましょう。下図のようにガス管が元栓の左右で繋がっている場合と繋がっていない場合をイメージしてみましょう。 onは「接触」，offは「離れて」ですね。



ガス灯から電灯になると，今度はガス管ではなく電気が通る電線をイメージすればいいでしょう。turn on the shower ならば水道管になりますね。

４．１．９　時代が変わっても残ったturn

時代が進んで20世紀の始めにはswitch on，switch offという言い方が登場しました。これはスイッチが「回すもの」から「押すもの」に変わったからです。でも「回す」の意味が入ったturn on, turn offという表現もまだまだ健在で，電灯，水道，ガス，テレビ，ラジオだけでなくその他の電化製品や目覚まし時計などにも広く用いられています。

He turned off his CD player.

彼はCDプレイヤーを止めた。
Turn off the alarm clock.
目覚まし時計を止めて。

動作や物と名前が一致しなくなっても使われている例は他にもあります。黒板は昔は本当に「黒い板black + board」だったのですが，緑色になった今も使われています。因みに，黒板にはつきものの白墨も同じような歴史があります。墨（すみ）というのは元々は文字の通り「黒い土」だったのですが，それがやがて一般に「文字を書く色素」の意味を持つようになり，後に朱色の筆記色素が発明されるとそれは「朱墨」（しゅぼく）と名付けられました。また黒板に字を書く道具として「白墨」（はくぼく）が生まれました。[板倉（1997）参照]

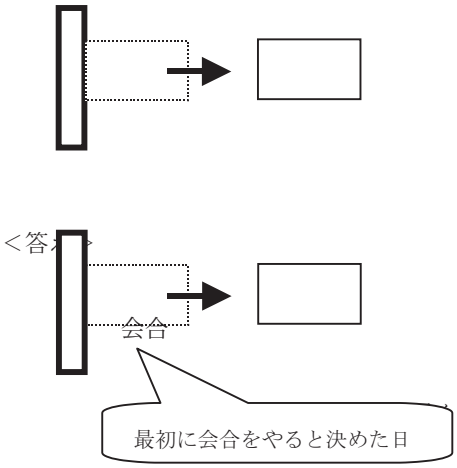
余談ですが，今の学校では「白墨」なんていう言葉を使う人はいないかもしれませんね。チョークchalkと言う人がほとんどでしょう。このチョークchalkは昔からずっと本当に「白いもの」でした。ラテン語のcalx（石灰）が語源です。calcium「カルシウム」もそこから派生しました。calxはさらにはギリシャ語 khalix（小石）にまで遡ります。小石を並べて計算したことからcalculate「計算する」が生まれました。[小島 (2004)]

4．1．10　元から考えれば分かる

以上のことから，turn「回す」，on「接触」，off「離れる」という意味さえ知っていれば，turn onやturn offの意味がどうして生まれるかを説明できることが分かったと思います。

では，ここで応用問題です。put off は「～を延期する」という意味があります。どのようにして考えると，「put置く」「off離れて」という意味から生まれるのでしょうか。

［ヒント： put off the meetingとして，「何」と「会合」とを「離れた状態」に「置く」かを考えてみましょう。下図も参照。］



4．1．11　downが付く場合

中学校の教科書に出てくるturnの熟語は他にturn down, turn out, turn overがありますが，まず，turn downから始めましょう。これはturn upとペアで考えると分かりやすいでしょう。

You are wasting your energy. Can you turn down the heater?
あなたはエネルギーを無駄遣いしています。
ヒータを弱くしてもらえますか。[Sunshine 1]
Will you turn up the TV? I can't hear it.
テレビの音を大きくしてくれませんか。
音が聞こえません。

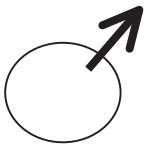
「ヒーターのスイッチを回して火力をdownの状態にする」，「テレビの音量スイッチを回して音をupの状態にする」と考えれば簡単ですね。（註７）

4．1．12　out が付く場合

turn outは次のような例文で出てきます。この場合のturnは変化した結果all rightに焦点が当てられ「～になる」「～に変わる」という意味になります。

Don't worry. Everything will turn out all right. 心配しないで。全ては上手く行くと思うよ。
[Sunshine 3]

「everythingがall rightの状態になる」ということですが，outはどう考えたらいいでしょうか。これは次のような図をイメージしてみて下さい。all rightの状態が外に出てくる，すなわちoutになると考えるわけです。



ところが次のように使われるturn outもあります。

Turn out the lights before you go to bed.
寝る前に電気を消しなさい。

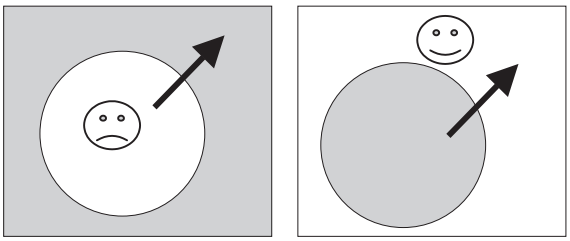
このoutをturn out all rightと同じように考えると，電気の明かりが外に出てくることになり「消えること」にはなりません。これはどう考えたらいいでしょうか。

では，ここで問題です。turn out all rightのoutとturn out the lightsのoutはそれぞれどちらのグループに属するでしょうか。

aグループ	bグループ
She went out for a walk. 彼女は散歩に出かけた。	The moon came out. 月が出た。
All the tickets were sold out. チケットは全て売り切れた。	He took out his pen. 彼はペンを取り出した。
The oil is running out. 灯油が切れかけている。	She picked me out a nice tie. 彼女は私に素敵なネクタイを選んでくれた。
DANGER. KEEP OUT. 危険。 立ち入り禁止。	We found out the reason. 私たちはその理由が分かった。

実はoutには見方によってふたつの意味になりうるのです。aグループのoutは外に出て行って見えなくなるoutで，bグループのoutは外に出て来て見えるようになるoutなのです。これは話者の視点，つまり話者がどこにいるかによって生まれる違いです。（註８）

a グループ　　bグループ



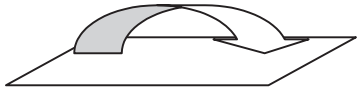
ただ，このturn out ～という表現は，turn out the gasとかturn out the lightのように「火や光りを消す」という意味では使えますが，turn out the radioとかturn out the television のようには使えません。これはthe gasやthe lightの場合は「燃料が無くなるout」，the radioやthe televisionは「スイッチを切るoff」と捉えるからです。

the lightやthe gasの場合はどちらの表現も出来ますが，「スイッチを切る」という気持ちの時はoff，「燃料の供給をなくす」という気持ちの時はoutとなります。このように句動詞の表現は付け加える副詞によって微妙なニュアンスの違いが使い分けられます。（註９）

４．１．13　turn overの考え方

この表現については３．１．４ですでに説明しましたが，もう一度取り上げましょう。以下の例文では何の上を覆うようにかは書かれていませんが，「オーブントースタの中の受け皿」をイメージすればよかったですね。（註 10）

Turn them over when the color changes.
色が変わったらそれを裏返しなさい。
[One World 2]



all over the worldなら上図の面が世界the worldになり，その上をぐるりと全てallおおっているoverなので「世界中で」という意味になります。

overが動詞と一緒に出てくる時もあります。fly overなら「何かの上をおおって飛ぶ」，come overなら「何かの上を越えてやってくる」，bring～ overなら「何かの上を越えて～を持っ

てくる」，get overなら「何かを乗り越えて手に入れる」と考えます。

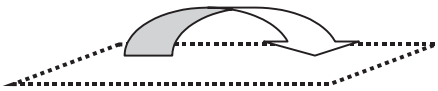
次の４つの例文を見て下さい。１と４はoverの後にhouses, a lot of difficultiesという名詞が来ていて，何を越えてが明示されていますが，２と３では省略されています。

1. They were flying over houses toward a forest. 彼らは森に向かって家々の上を飛んでいた。[Total 3]
2. A: Do you live near here?
   B: Yes, in Ichiban-cho.
   A: Really? I live in Niban-cho.
   B: So you live in the same area. Come over sometime. いつか来て下さい。
   A: Thank you. [Columbus 1]
3. Dr. Tanaka: Does she eat three meals?
   Mrs. Baker: Yes. But she sometimes skips lunch.
   Dr. Tanaka: I see. Don't worry, Mrs.Baker. Bring her over this afternoon.
   今日の午後彼女をこちらに連れて来なさい。[Columbus 1]
4. Chris once gave up hope for his future but he got over a lot of difficulties and tried to get his dreams back. クリスは一度は将来の夢をあきらめたが，たくさんの困難を乗り越えて自分の夢を取り戻そうとした。[One World 3]

さてここで問題です。例文２と例文３では「何の上をおおうように」来るのか，あるいは連れてくるのでしょうか。

例文２　Come over sometime.

例文３　Bring her over this afternoon.



答えは，例文２では「二番町か一番町への道のり」，例文３では「ベイカーさんの家からお医者さんのところまでの道のり」がイメージされています。

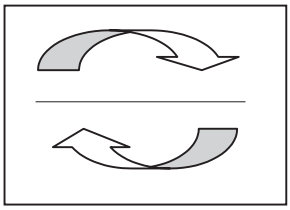
getについても復習しておきましょう。He got over a lot of difficulties. にはoneselfを補って考えるのでしたね。

セン　マル　セン
He (got) himself over a lot of difficulties.
彼　得た　自分自身　多くの困難を乗り越えた状態
→ 彼は自分自身が多くの困難を乗り越えた状態を得た。
→ 彼は多くの困難を乗り越えた状態になった。
→ 彼は多くの困難を乗り越えた。

この文のoverは「何かをおおっている矢印」の最後のところ，つまり困難を乗り越えた結果に話者の気持ちがあります。The game is over.（ゲームは終わった）のoverと同じです。

最後にover and over という熟語についても説明しておきましょう。これはoverが繰り返されているので下図のようなイメージになり，「何度も繰り返して」という意味になります。

I sang the same song over and over.
私は同じ歌を何度も繰り返して歌った。
[Total active 2]



５．おわりに

本論を書く中で私自身が面白いと感じたことのひとつは，ひとつの言葉が当初の字義通りの空間的な意味から比喩的に転用されていくことである。

turn downという熟語の意味を調べていたとき，turn on / offの類推からこれもきっと「何かを回して下げる」が元の意味ではないかと推察した。

それで，偶然開いた斎藤秀三郎『熟語本位英

和中辞典』(1933) に「turn down（ランプの心を）引っ込ます」を見つけたときにこれに違いないと確信した。つまり，turn downは「ランプの芯を下げて火を弱くする」が原義だと思ったのだ。

しかしこの予想は外れた。OEDを見てみるとこの意味での初出は1868年でturn onの初出1833年よりも後であった。turn downの初出の意味は「put down, send to lower position (as in a class at school)」（下の位置に置く，送る）で1581年と記載されていた。ということは，この時点で副詞のdownにおいてすでに多様な比喩的意味が生まれていて，それとturnが結合したということなのだろう。

そしてその少し後の1601年に「to fold or double down; to bend downwards」(二重に折る；下向きに曲げる）という意味が出ているのが目に止まった。というのは，第４節の註８における非比喩的な意味の例文として，当初は以下の例文を挙げていたからだ。

Please don't turn down the corners of the pages. [Courtney, R. (1983)]

ところが，寺島セミナー「課題研究」で「ページを折るのは下向きではなくて上向きではないか」という指摘を受けた。そしてこの例文がdown の物理的空間的意味を持つ例としては不適切であることが分かり次の例文に差し替えることになった。

He turned down the brim of his straw hat to keep the sun out of his eyes. [Cowie et al. (1975)]

この例文においては確かに帽子の縁は下向きに曲げられている。

しかし英語の母語話者がページを下に折ると考えることは不自然さを感じるので，おそらくはページをめくって読み進んでいく方向とは逆向きであることをdownで表現したのではないかと推測される。つまりこの意味においてもすでに比喩性が生じていたのである。英和辞典の中には「（ページなどを）折り返す」と訳語を与えているものあった。（註c）

いずれにしてもこれまで漫然と眺めていたときには見えなかった言葉のからくりが本研究を通して見えるようになったことは大きな収穫であった。

今後追求したいテーマとしては，他の動詞を含んだ熟語に関して，補う目的語の系統性，つまりどんな時にどんな目的語を補うと元の構成素から熟語の意味を復元しやすいか，を考えている。

NOTES

［なお，以下の(a)(b)(c)は寺島による追加である］

（a）この「TMメソッド」という名称が使われるようになったのは寺島隆吉・寺島美紀子 (2004) が出版されてからである。それまでは「寺島方式」とか「記号研方式」という名称が使われていた。また「語順訳」という方法については寺島隆吉・寺島美紀子 (2001) として教科書をTMメソッドで編集し直したものがあるので，それを参照されたい。なおJAASET は Japan Association of Applied Semiotics for English Teaching の略称である。

１．単語数の平均は瀬谷 (2004) の下記の表から計算した。また複合語と熟語数は抽出により概数を求めた。

教科書	1年	2年	3年	教科書別語彙数
TOTAL	458	648	853	1382
SUNSHINE	427	730	834	1353
CROWN	403	727	753	1274
HORIZON	406	681	871	1314
ONE WORLD	392	568	745	1189
COLUMBUS	432	790	962	1450
TOTAL active	445	787	828	1408

２．板倉聖宣 (1988) は「問題－予想―討論―実験」という流れで授業が展開できるようにテーマごとに授業書を作成しており，その授業書は理科だけではなく美術，社会科学，数学などの分野にまで及んでいる。そして実際に実験ができない天文学や地学の分野や社会科学の授業は「イメージ検証授業」と呼び，また数学については「仮説証明授業」という用

語を用いている。

３．田中茂範 (1987-62) は，GETの意味分析においてGETの支配する「小さな節」を設定する。そして，GET (X,Y) において，動詞の指定がないときは，Yの要素として名詞句がくればHAVEが，形容詞が繰ればBEが選択されると述べている。

a. 動詞の指定がある場合

I'll get her to come to the party.

… GET ［SELF COME to the party］

b. 動詞の指定がない場合

She got angry.

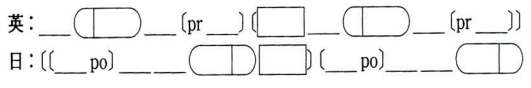
… GET ［SELF BE angry］

She got my joke.

… GET ［SELF HAVE my joke］

つまり，GETは起動動詞として［　　］の状態を引き起こすと考えるわけであるが，本論では「get（得る）＋目的語（=名詞もしくはネクサス）」という枠組みを用いて説明を試みた。この方法は寺島隆吉 (1986, 2000) が提唱するもので，getの持つ「獲得」と「状態変化」という意味が統一的に処理出来る。

４．「センマルセン」という用語は，寺島隆吉 (1986) が以下のような英語と日本語の対照構造図を示して，英語の基本構造は「名詞＋動詞＋名詞」であると述べたことに由来する。下図は寺島隆吉 (2000) において改定されたものである。



寺島はこの「センマルセン」を，英語の読みにおける「水源地」と呼び，英文をこの単文に還元しながら読むことを提唱している。また書くことに関しても，寺島隆吉・寺島美紀子 (2004) において日本語を「センセンマル」の単文に転換して英訳することを提案している。

５．酒井 (2005) もgetに関する様々な表現に関して，以下のような再帰代名詞を補った説明を行っているが，getに「得る，手に入れる」から派生した「～を連れて行く」という訳語を与えている。

I'll get you home.

She got ［herself］ off the bus.

John will get ［himself］ back soon.

He got ［himself］ out of difficulty.

We got ［ourselves］ to Los Angeles.

また，大西ほか (1999) では以下の文の説明において，「<　　> の状況をgetする」と説明している。

Tom got <him mad>.

Let's get <all the luggage into the car>.

I got <my parents to babysit>.

I'll get <John to help you with the dishes>.

I got <her to translate my speech>.

６．影山 (1997:140) では，英語の動詞は自動詞と他動詞という観点から次の３つのグループに大別できると述べている。

a. 他動詞しかないもの

Oswald assassinated Kennedy.

*Kennedy assassinated.

b. 自動詞しかないもの（非対格動詞）

A traffic accident happened.

*The driver happened a traffic accident.

c. 自他両用の動詞（能格動詞）

He opened the door.

The door opened.

そして英語の能格動詞の基本を使役構造とし，そこから反使役化によって自動詞が導かれる，つまり他動詞から自動詞が派生するという考え方を支持している。

さらに，影山 (1997:148) は「能格動詞はたとえ自動詞であっても概念構造において使役構造を持っているが，純粋な非対格動詞は外的な使役作用を全く含んでいない」と述べ，その根拠として前者においては再帰代名詞が現れることがあると指摘している。

1. This door opens itself.
2. The fire rapidly spread itself through the building.
3. *A traffic accident happened itself at the corner.
4. *Bright ideas emerged themselves.

このことから考えると，turnは自他両用の動詞でその自動詞については再帰代名詞を補い，「回転する」の意味を「自らを回転させている」と解することが出来る。

(b) この説明では「回る」という回転から「変わる」という変化の意味が生じたとしてあるが，turnの元々の意味が「回す」という他動詞だったとすれ

ば，やや説明不足であろう。ここでも先と同じように目的語としての再帰代名詞 [itself] が省略されたものと仮定した方が説明の一貫性が保てるし真実に近いのではないか。

The lotus flower faded and turned [itself] into a pod of seeds. [One World 3] 蓮の花は消え，種のさやになった。

７．副詞の意味は空間的な意味から比喩的な意味まで幅があり，句動詞にはその意味が反映される。次の例文における downは1 → 2 → 3 の順に比喩性（抽象性）が高まっている。

1. He turned down the brim of his straw hat to keep the sun out of his eyes. [Cowie et al. (1975)]

彼は日が目に入らないように麦わら帽子の縁を下へ折り曲げた。

2. Please turn the radio down. I'm trying to sleep. [Courtney (1983)]

ラジオの音を小さくして下さい。寝ようとしてるんで。

3. Why was I turned down for the job? Is it because I'm a woman? [ibid.]

どうして私はその仕事に就くことを断られたのだろうか。私が女だという理由だからなのか。

８．リンドナー (1982) は以下のような図（イメージ・スキーマ）1，2でこの二つのoutについて説明している [松本曜 (2003)]。図1がaグループ，図2がbグループに対応する。本論ではこの図を簡略化して用いた。

図1

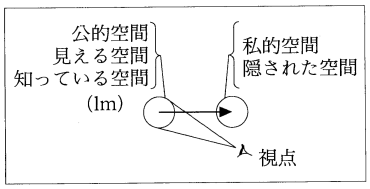
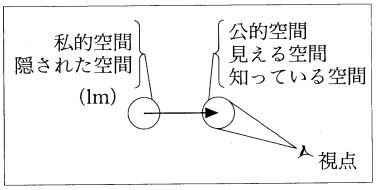


図2



[註：lmはlandmarkerの略で「背景」を意味する。矢印の動きで示されるtrajector「物体」に対する言葉である。]

９．burn up, burn down, burn outは「全て燃えてしまう」という意味であるが，厳密には副詞の意味の違いが反映しているのではないかと思われる。

1. The spacecraft burned up when it re-entered the earth's atmosphere. 大気圏突入時に宇宙船は燃え尽きた。

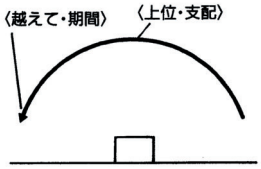
2. The old house burned down last night in the big fire. その古い家は昨晩の大火で全部燃えてしまった。

3. The building was burned out and only the walls remained. その建物は全て燃えてしまって壁だけが残った。

例文1のupでは，「燃えるときに炎がめらめらと上に昇っていく様子がイメージされ，それが上りきって全て燃やしてしまう」というニュアンスがあり，例文２のdownは「大きな建物が焼け落ちる」という意味合いが含まれる。また，例文３のoutは「建物が燃えてしまって視界から消えて無くなる」という意味合いが生まれ，「壁だけが残った」という文脈がよく理解できる。

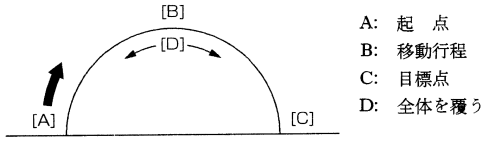
10. overのイメージを表す図には，図aのように水平面と対象物のどちらも示されたもの，図bのように水平面のみが示されたもの，図cのように対象物のみが示されたものがある。「何かの上をおおう」というイメージは３者に共通している。

図a



対象に対して覆うように上方に位置しているようすを表す。比喻的に《支配》を表す。さらに《端から端まで》の動きと状態を表す。…政村 (1989)

図b



LakoffやBrugmanの図式論と決定的に違うのは，コア図式はoverの全ての用例の背後にある図式であるとみなすところである。…田中・松本 (1997)

図c

overの基本イメージは次の図のように，「ある物体の上部を通過する」ということです。そう「越える」という日本語がぴったりです。…大西 (1996)

（c）山田さんは「しかし英語の母語話者がページを下に折ると考えることは不自然さを感じるので，おそらくはページをめくって読み進んでいく方向とは逆向きであることをdownで表現したのではないかと推測される」と書いているが，その場合は 'turn down' ではなく 'turn back' を使うのではないだろうか。その証拠に『ランダムハウス英語辞典』には 'turn back' に「折り返す」という訳語をつけ次のような例文をあげてある。

Turn back the page to keep the place. 場所がちゃんと分かるようにページを折っておきなさい.

つまり 'turn down' と 'turn back' では折り曲げ方が違うのではないかと想像される。しかし，いずれにしてもこれは英米人に尋ねて確認する必要があろう。

付記：turn down the corner of the pageについて，山田の勤務校のALT（米国人男性，26歳）に尋ねたところ，ページを折る向きは日本人と同じで，ページの先端の動きは最初は上向きの弧を描くが，直角の地点を過ぎてからは下向きの弧を描くので，downとなるのではないかということだった。これは本論でも取り上げた get over の考察と共通するもので，turn down the corner〜における down は「動作の結果」「動作の目標点」に焦点が当てられた副詞と言えるだろう。

REFERENCES

Courtney, Rosemary (1983) *Longman Dictionary of Phrasal Verbs*, Longman Group Limited

Cowie, A.P. and R.Mackin (1975) *Oxford Dictionary Of Current Idiomatic English, Volume 1: Verbs with Preposition & Particle*, Oxford University Press

板倉聖宣 (1988)『仮説実験授業の研究論と組織論』仮説社

――― (2001)『仮説実験授業のABC』第4版　仮説社

板倉聖宣，松野修 (1998)『新総合読本3，社会の発明発見物語』仮説社

板倉聖宣，村上道子編著 (1997)『新総合読本1・なぞとき物語』仮説社

――― (1998)『新総合読本2，知恵と工夫の物語』仮説社

影山太郎 (1996)『動詞意味論――言語と認知の接点』くろしお出版

小稲義男ほか (1985)『新英和中辞典』研究社

小島義郎ほか (2004) 『英語語義語源辞典』三省堂

小西友七 (1976)『英語の前置詞』大修館書店

小西友七 (1985)『英語基本動詞辞典』研究社

Lakoff, G, & M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*, Chicago:University of Chicago Press

レイコフ，G. & M.ジョンソン，渡部昇一ほか訳 (1986)『レトリックと人生』大修館

正村秀實 (1989)『図解英語基本語辞典』桐原書店

松本曜 (2003)『認知意味論』大修館書店

松波有ほか (1983)『英語学事典』大修館書店

大西泰斗，ポールマクベイ (1996)『ネイティブ・スピーカーの前置詞』研究社

――― (1999) 『ネイティブスピーカーの単語力 1 基本動詞』研究社

酒井典久 (2005) 『英語のしくみが見える英文法』文芸社

セイモア，ジョン著，小泉和子監修，生活史研究所翻訳(1989)『図説イギリスの生活史－道具と暮らし』原書房

瀬戸賢一 (1995)『空間のレトリック』海鳴社

――― (1997)『認識のレトリック』海鳴社

――― (2001)『日本語感覚で話す英会話』ノヴァ

Simpson, J.A. et al. (1989) The Oxford English Dictionary, Clarendon Press Oxford

田中茂範 (1987)『基本動詞の意味論：コアとプロトタイプ』三友社出版

――― (1990)『英語動詞の多義の構造』三友社

田中茂範・松本曜 (1997)『空間と移動の表現』研究社

寺島隆吉 (1986)『英語にとって学力とは何か』三友社
――― (1990)『読みの指導と英文法』三友社
――― (2000)『英語にとって文法とは何か』あすなろ社／三友社出版
寺島隆吉・寺島美紀子 (2001)『魔法の英語：ふしぎなくらいに英語がわかる練習帖』あすなろ社／三友社出版
寺島隆吉・寺島美紀子 (2004)『センとマルとセンで英語が好き！に変わる本』中経出版
若林俊輔 (1997)『ヴィスタ英和辞典』三省堂
山田昇司 (1999a)「Walk down the streetをめぐって」"Applied Semiotics" Vol.4, No.7, P.23
――― (1999b)「Walk down the street その後」"Applied Semiotics" Vol.4, No.8, P.23
――― (1999c)「群動詞をもう一度考える」"Applied Semiotics" Vol.4, No.9, P.24
――― (2000a)「熟語について――その 4」"Applied Semiotics" Vol.4, No.10, P.21
――― (2000b)「自動詞の他動詞的分析」"Applied Semiotics" Vol.4, No.10, PP.22-23

＜参考サイト＞

Online Etymology Dictionary
http://www.etymonline.com/
瀬谷廣一 (2004) 中学校英語教科書〈教科書別・学年別・品詞別〉語彙分析統計
http://www.eng.ritsumei.ac.jp/seya/
TG：ガス博士/ガス灯の光
http://www.tokyo-gas.co.jp/ghakase/dr03/dr03.html
Full text/script of the play Merchant of Venice Act I by William Shakespeare
http://www.william-shakespeare.info/act1-script-text-merchant-of-venice.htm